

投稿論文

スクールカウンセラーによる不登校生徒に対する支援
— 「居場所環境」という視点からの考察 —

杉本 希 映*

庄 司 一 子**

A Case about School Refusal Junior High School student:
A Consideration from view point of "Environment of Ibasho (Existential Place)"

Kie SUGIMOTO

Ichiko SHOJI

本稿では、スクールカウンセラーである筆者が支援した不登校女子生徒に対する経過を報告するとともに、「居場所環境」という独自の視点から考察を行った。事例の女子生徒は、クラスでの友だち関係のトラブルから、身体症状を呈し、不登校に至った。スクールカウンセラーとの相談を重ねる中で、適応指導教室への通級が可能となり、高校進学を果たした。この過程を、後に行った本人に対する質問紙調査とインタビュー調査を元に、「居場所環境」という視点から考察した。その結果、中学生の頃の「居場所環境」を整えることの重要性と、「特別な居場所」の存在を指摘できたと考える。

1. 問題と目的

文部科学省による生徒指導上の諸問題の現状についての2005年度における報告によると、中学生の不登校生徒は、99578人であり、不登校生徒が在籍する全学校数に占める中学校の割合は、84.3%となっている(2007, 文部科学省)。中学生の不登校生徒数は、2002年度以降4年連続で減少が報告されてはいるものの、約8割の中学校が抱える問題であることから、依然として看過できない問題であるといえる。

不登校問題と関連する要因の実証的研究は、これまでに蓄積されており、ソ-

※筑波大学大学院博士特別研究員

※※筑波大学大学院人間総合科学研究科

シャルサポートとの関連（例えば、岡安・嶋田・坂野，1993；菊池，1999），家族関係との関連（例えば，酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村，2002；五十嵐・萩原，2004）などが挙げられる。そのような中，子どもの不登校問題を考えるための新たな概念として1980年代より，「居場所」という言葉が登場してきた（安齊，2003；住田，2003）。この「居場所」という概念は，教育現場やカウンセリングなど臨床の場から問題提起されたものといえる。1992年には，文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」という報告を出し，学校内での「心の居場所」づくりの必要性が指摘された。以降，「居場所」という概念を実証的に研究していく動きが見られるようになる（例えば，小畑・伊藤，2003；田中・田罵，2004）。杉本・庄司（2006a）は，「居場所」という概念をさらに包括的に捉える概念として「居場所環境」を提唱した。「居場所環境」とは，「様々な特性を持った居場所をどのようなバランスで持っているのかを総合的に捉えた場合の個人を取り巻く環境」と定義される（杉本・庄司，2006b,c,d）（Figure 1）。「居場所環境」は，中学生の学校適応あるいは大学生の自我同一性と精神的健康度と関連していることが明らかとされており，どのような「居場所環境」を持っているかということが，その時期の適応に影響を及ぼしている可能性が示唆されている（杉本・庄司，2006b,c,d）。

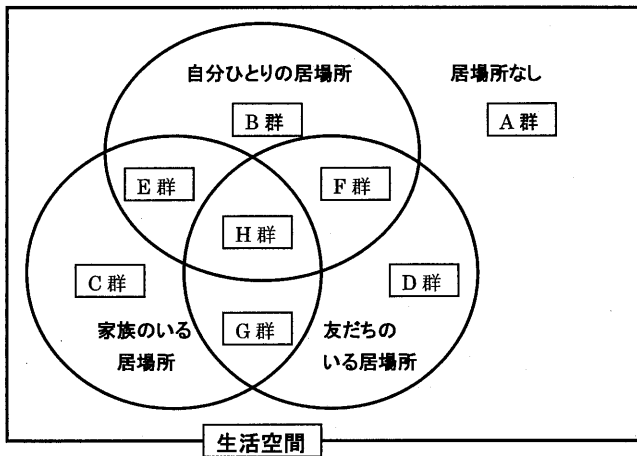


Figure 1 「居場所環境」の8分類

また、大学生の自我同一性と精神的健康度には、過去の中学生の頃の「居場所環境」が関連しており、大学生の現在の「居場所環境」よりも関連が強いことが明らかとなっていることから、中学生の頃の「居場所環境」の長期的な影響も示唆される(杉本・庄司, 2006c,d)。このことから、中学生の頃の「居場所環境」は、その時期の適応とともに、その後の青年期におけるメンタルヘルスにも影響を及ぼす可能性があることから、その重要性が指摘できる。では、中学生の頃には、どのような「居場所環境」を持っていることが良いのであろうか。メンタルヘルスに寄与する「居場所環境」は、発達段階により異なっており、中学生の時期には、「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」、大学生では、「自分ひとりの居場所」と「友だちのいる居場所」を含んだ「居場所環境」が必要であることが明らかとなっている(杉本・庄司, 2006b, c, d)。

中学生が不登校となるきっかけは、「学校生活に起因」が一番高く、ついで「本人の問題に起因」、「家庭生活に起因」の順となっている。「学校生活に起因」では、「友人関係をめぐる問題」、「家庭生活に起因」では、「親子関係をめぐる問題」が最も高くなっている(文部科学省, 2007)。つまり、中学生が不登校となるということは、上述した中学生に必要な「居場所環境」の2つの「居場所」、「友だちのいる居場所」と「家族のいる居場所」の喪失の危機と捉えることができる。しかし、不登校の中学生の「居場所」についての実証研究は、これまでのところ見当たらない。これまでの研究は、登校している生徒たちの「居場所」と学校適応、精神的健康度との関連である。実際に不登校となっている生徒に関する調査は、倫理上の問題、さらに被験者数の確保の問題があり、「居場所」研究においても実証的研究が行われていない背景には、この問題があるからだと考えられる。不登校児童生徒から問題提起された「居場所」であることから、不登校児童生徒の「居場所」の研究は急務であると考えられる。

そこで本稿では、不登校の中学生の「居場所環境」の様相を把握するために、事例研究とインタビュー調査を用いて、質的に分析することを試みた。倫理面を配慮して、事例対象者は、中学生の頃に不登校を経験したが、インタビュー調査時には高校を卒業し、その後の進路も決まり、社会的な適応を果たしており、この研究の主旨を理解し同意してくれた人とした。また、分析方法については、質的な方法で分析することで、これまでの量的データの分析では削除されてしまうような少数のデータを見つけ出すことが可能になると考え、採用した。

本事例の女子中学生は、クラスの友だちとのトラブルから身体症状を訴え、不登校となった。スクールカウンセラーであった筆者（以下、S C）が、学校の相談室において継続相談を担当し、完全な学校復帰はしなかったものの、校内の相談室への登校と市の適応指導教室（現在の教育支援センター）への通級を行い、高校進学を果たした。その経過を報告するとともに、後日行った質問紙調査とインタビュー調査を元に、これまでに明らかにされている中学生という発達段階のメンタルヘルスに寄与する「居場所環境」と、不登校生徒の「居場所環境」を比較検討し、考察することが本稿の目的である。

2. 事例の概要

(1) 事例

週1回スクールカウンセラーとして筆者が勤務していた学校での事例である。中学2年生女子（以下、A子）。中学2年の2学期11月より不登校となり、卒業までの15ヶ月間、S Cが中学校内の相談室でA子とA子の母親に対して継続面接を行った。また倫理的な面を配慮し、事例は本質を損なわない程度に変更している。

(2) 家族

父親と母親とA子の3人家族。子どものことにはほとんど関わらない父親に対し、子どもに対し過干渉気味に関わる母親であった。

(3) インテークと援助方針

インテーク（1回目母親のみ、2回目A子と母親）を行い、支援方針を決めた。（〈〉はS Cの発言、「」はA子および母親の発言である。）

A子が2年生の11月末に母親から相談の予約が入り、初回面接となる。初回は母親のみが来談し、11月の始めから全く学校に行っていないこと、クラスに一緒にいる友だちがいないうだが休む理由はよくわからないこと、朝になると吐き気がひどく登校できないが午後は元気になること、外出をしなくなってしまったことが話される。母親は、学校を長く休むことで、勉強が遅れること、また高校受験が不利になるのではないかとこのことを心配しており、勉強や進路にこだわる様子うかがえた。また生育時から現在まで、特に問題となったエピソードはなく、突然行けなくなってしまうことに、母親自身が動揺し精神的に不安定になっている様子うかがえた。担任教員からは、合唱祭のリーダーを担当していたが、クラスをまとめることができなかったことが原因としてあるのではないか

という情報が得られた。

1週間後、A子が母親と共に相談室に来室する。表情がこわばり、緊張している様子がうかがえたが、応答はきちんとしておりまじめな印象を受けた。A子は「同じ班の人が苦手な人ばかり。自分が何か言うところこそ陰口を言われる。」と言うものの、SCの「ずいぶん辛い状況みたいだけど？」という問いに対し「自分ではそうは思わない。嫌なこととか特にないけど、朝になると調子が悪くなる。」「班替はしなくていい。自分が頑張れば行けるから。」と話した。

この時点でA子は、学校に1ヶ月も行けていない状況を受け入れておらず、自分が頑張れば行けると考えていた。自分の辛さや不安を意識化できず、そのことが身体症状につながっていると考えられた。この時点までに、A子は医療機関に受診し、検査により異常はないことが確認されていたため、A子の身体症状は、精神的なストレスからくるものと推測された。そこで今後の方針として、まずA子の教室に戻りたいという気持ちを大切に、週1回の相談室登校から始め、そこからゆっくり教室へのステップを考えていくことを3人で確認した。SCとしては、相談を継続することにより、信頼関係を築き、A子が安心できる場を提供することで、A子の特にネガティブな感情の表出を手伝うことで、まずは身体症状の改善を第一の目標とした。その後、A子と共に、学校復帰の方向性を考えていくこととした。

3. 事例の経過

第1期 相談室登校期（中学2年2学期～3学期）

インテーク以降、週1回1時間の相談室登校が安定してできるようになる。問題に焦点を当てての言語化が当初は難しい状態であったことから、始めは主に雑談や簡単なゲームなどの遊びを通して関わった。2ヶ月を過ぎた頃から、クラスの班の友だちのこと、友だちだと思っていた人に嫌なうわさを流されてしまい学年中に広まってしまったことが話され、「つらかった」「同じ学年の人に会いたくない」と涙ぐむ様子が見られた。次第に現実を受け入れ、言語化されてきているとSCは感じた。相談室登校時に身体症状が出ることもなく、家でも元気になってきていることから、次のステップとして、相談室でのグループ活動（他の不登校生徒のグループ）の時間に参加することを提案した。A子は、その時間にも来るようになり、SCだけではなく、他の生徒とも関わりを持つようになった。し

かし、元気になってきたA子を見て、母親が「このままでいいのでしょうか？家でテレビばかり見て勉強もしないんです。」「担任は、何もしてくれないんでしょうか。」とA子に対する不満や強い学校批判を泣きながらSCに口にするようになった。

第2期 適応指導教室登校初期（中学3年1学期）

当初の教室へ戻りたいというA子の気持ちは、この頃にはすっかりなくなっており、クラスの人に会いたくない、同じ学年の人に会いたくないと自分の気持ちの把握ができており、無理な頑張りをしなくなっていた。しかし、3年生になったことで、母親の焦りや不安が強くなり、A子の家での過ごし方やクラスに戻らないことに干渉するようになり、次第にA子が家庭に対する不満を口にするようになる。「自分ひとりの部屋がない。何をするのも母親に見られていて、いちいち言われる。家出したい。」などA子はSCに訴えた。このままの状態では、家庭での安定が崩れる可能性が感じられた。そこでSCから、適応指導教室への登校をA子と母親に提案した。

A子の在住する市には、市の教育委員会が行っている適応指導教室（現、教育支援センター）があり、学校に行けない市内の小・中学生が通っている。通級児童生徒の人数は、時期によっても異なるが、およそ10人から20人程度である。退職した教員、教育や心理を学ぶ大学院生、他にも大学生のボランティアもあり、常時3人から4人のスタッフが支援に当たっている。学校内ではなく、地域の公共施設に設置されていることから、人目を気にすることなく通える環境にある。

このような場所であることを説明したところ、母親は是非通ってほしいと希望したが、A子は新しい人たちの中に入ることや、友だちができるかという不安を口にした。そこで、通う時間を制限し、行けそうな時間帯から通うこととした。以降、1学期間は、週1回の適応指導教室への登校と、週1回の学校の相談室登校を継続した。最初は、適応指導教室登校の日に吐き気など身体症状を訴えたが、他の学校の女子の友だちができたこともあり、次第に楽しそうに通う様子が見られるようになった。また、適応指導教室で勉強をしたことで、勉強に対する興味が出始め、塾にも通うようになった。SCは、母親とも定期的に面接をし、母親の焦りや不安を受け止めると共に、A子の状態の理解を一緒に考えていく作業をした。A子が通う場所が増えたこと、勉強を始めたこともあり、母親が落ち着きを取り戻した様子が見られた。

第3期 適応指導教室への定着期（中学3年2学期～3学期）

2学期になり、A子の希望もあり、適応指導教室へ毎日通うこととなる。学校の相談室の面接も週1回継続した。A子からは、適応指導教室で男女の友だちができたこと、その友だちと休日なども遊んでいることなど、楽しそうな様子が話された。また、A子が行事を計画したりといった、積極的な面も見られた。SCからの〈無理してない？疲れてない？〉との質問に対しては、「全然平気。すごく楽しい。」との返答であった。しかし、適応指導教室のスタッフからは、「いつもすごく声が大きくて、テンションが高い。」ということや、「羽目を外した行動が目立つ。」という様子が聞かれた。

第4期 中学校卒業から高校入学後

家族とも相談し、自分で行きたい高校を選び受験する。受験直前には、身体症状が見られたが、受験をすることができ、その結果、希望の高校に合格することができた。最後まで、学校のクラスに戻ることはなく、卒業式も体育館の後ろでの参加であった。しかし適応指導教室の卒業式では、A子たち3年生が企画したバンドの発表会をしたりと充実したものとなった。卒業の時点で、SCとの面接も終結となった。

高校1年の1学期、A子から中学校の相談室に連絡が入り、面接を希望した。部活の先生とうまくいっていないこと、学校を休んでしまっていることなどが話された。しかし中学の時の休み始めの時と違って、きちんと自分の状態を理解できている印象があり、前向きな考え方を自分でできるようにもなっていた。この時期、適応指導教室にも頻繁に遊びに来て、同じ悩みを適応指導教室のスタッフにも聞いてもらっていたようである。以降、SCの所には2年生の2学期、3年生の3学期と1回ずつ面接に来た。2年生の2学期の面接時には、学校のレポートで自分は不登校をテーマに選んだので、SCにインタビューしたいとのことで話しに来た。担任の先生と友だちがすごく良く協力してくれて、学校には1年生の2学期から復帰し、その後もずっと行っていると報告してくれた。この時点で、A子は中学生の頃の不登校だった体験を肯定的に受け入れていることがうかがえた。3年生の3学期の面接時には、「専門学校に合格しました」と嬉しそうに報告してくれた。

4. 質問紙調査とインタビュー調査の結果

(1) 調査対象者

調査時、A子(20歳)、専門学校生。

(2) 調査内容

①質問紙調査

- i 調査時現在の「居場所環境」と中学生の頃の「居場所環境」について
- ii 「居場所」の心理的機能尺度(杉本・庄司, 2006a Appendix 1)を中学校の頃の教室, 相談室, 適応指導教室について回想を促し実施した。

②インタビュー調査(半構造化面接)

- i あなたにとって「居場所」とは何か
- ii 中学生の頃の「居場所環境」について
- iii 調査時現在の「居場所環境」について
- iv 家族関係について
- v 学校生活と友だち関係について
- vi 自分の性格について
- vii 「居場所環境」が与える影響について

(3) 質問紙調査の結果

①中学生の頃の「居場所環境」と現在の「居場所環境」について

A子が記入した中学生の頃の「居場所環境」の結果をTable 1, 2に示した。中学校の頃の「居場所環境」としては, G群(「家族のいる居場所」+「友だちのいる居場所」)になるが, 2番目の学校の相談室は, 友だちの他にSCもいたので, 「家族・友だち以外の人いる居場所」もあったと言える。重要度は, 「学校の相談室」「適応指導教室」「家」という順に高いという結果であった。調査時現在の「居場所環境」は, 「家」「学校」であり, G群(「家族のいる居場所」+「友だちのいる居場所」)であった。

②中学生の頃の教室・相談室・適応指導教室の「居場所」機能について

中学生の頃を回想し, 教室・適応指導教室・相談室の3ヶ所それぞれに対し, 杉本・庄司(2006a)の作成した「居場所」の心理的機能尺度を行った。6つの下位尺度の平均値をFigure 2に示した。教室の「居場所」機能が特に低く, 本人が話したとおり, 教室が「居場所」として機能していないことがうかがえる。教室の「思考・内省」機能が高いのは, 教室にいても, 友だちと関わることなく, 「一人

でポーっと考え込むことが多かった」ということが反映されていると考えられる。

(4) インタビュー調査の結果

A子のインタビュー調査の回答を Table 3 に示した。

①「居場所」について

「居場所」とは、自分にとってどのような場所かを聞いたところ、「落ち着ける場所」と答えた。

②中学校の頃について

i 学校を休んでいた時期について

学校を休んだ理由については、クラスに友だちがいなかったこと、理由は分からないが体調が悪くて行けなかったことが話された (Table 3, 1-①~③)。学校を休み始めてから、SCに会うまでの時期について聞くと、「死にたい」と思うほ

Table 1 A子の中学生の頃の「居場所環境」の結果

具体的な場所	「居場所」分類	重要度
適応指導教室	友だちのいる居場所	9
学校の相談室	友だちのいる居場所	10
	家族・友だち以外の人のいる居場所(SC)	
家	家族のいる居場所	7

Table 2 A子の現在の「居場所環境」の結果

具体的な場所	「居場所」の分類	重要度
家	家族のいる居場所	8
学校	友だちのいる居場所	9

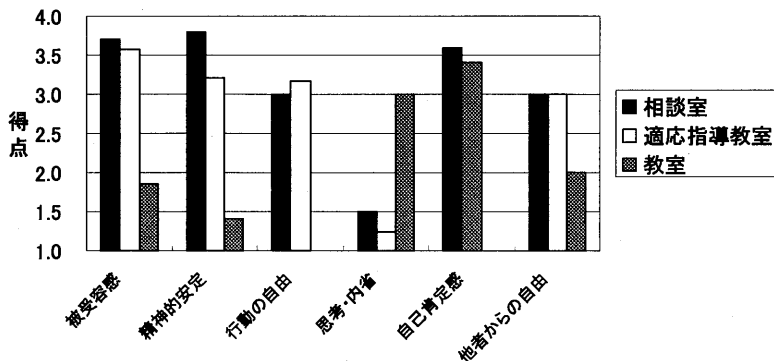


Figure 2 教室・適応指導教室・相談室の「居場所」の心理的機能の平均値

ど精神的不安定であったことが話された (Table 3, 1-④~⑥)。

ii 学校の相談室について

そのような不登校の状態から、まず学校の相談室に通うようになり、そこを「居場所」として選んでいる。「自分のことを話せた」ことを理由としてあげている (Table 3, 2-①・②)。不登校となり人との関わりが家族以外になくなったA子にとって、相談室はSCという他者と話せる場となったということが要因のようである。自分のことを話し、受け止めてもらえる、また雑談をしながら楽しさを感じられる場であったことから、「被受容感」「精神的安定」機能の高い「居場所」であったと言える。

iii 適応指導教室について

ついで、重要度の高かった適応指導教室について聞くと、同じ立場の中学生と出会えたことで、精神的に楽になったことが理由としてあげられた (Table 3, 3-①・②)。「被受容感」「精神的安定」が得られていたことが伺える。他の点では、「行動の自由」が学校と比べ高かったこと (Table 3, 3-③)、適応指導教室の先生が話しやすかったこと (Table 3, 3-④) も理由としてあげている。学校の先生と違い、よく話を聞いてくれて、自分を受け入れてくれると適応指導教室の先生を感じていたことが大きかったようである。この面からも、「被受容感」を感じていたと言える。

良かった面と同時に、振り返ると、無理をしていたことも話された (Table 3, 3-⑤・⑥)。当時は「居場所」となっており、無理をしていることには気づいていなかったが、振り返ると、その時の自分は本来の自分ではなかったとしている。

iv 家 (「家族のいる居場所」) について

家を「居場所」に選んだ理由としては、「落ち着ける」ことをあげた (Table 3, 4-①)。「精神的安定」の機能が高いと言える。当時の親との関係は、特に母親が学校に行かないことを受け入れてくれていると感じていたことが伺える (Table 3, 4-②)。さらに、適応指導教室に通い始めたことで、「(親は) 安心はしたと思う。ずっと家にいたから。ずっと、勉強の面は心配してたから。」とも話した。適応指導教室という「居場所」ができたことは、A子にとっても良いことであったが、親の安心にもつながったと考えられる。

③現在の「居場所環境」について

i 学校（「友だちのいる居場所」）について

学校を「居場所」に選んだ理由は、友だち関係をあげている（Table 3, 5-①）。中学生の頃と比べて深い友だち関係になったという変化も同時に話された（Table 3, 5-②）。現在の友だち関係は、適応指導教室の時のように、無理してテンションをあげることもなく、「普通」でいられるとのことである。

ii 家（「家族のいる居場所」）について

現在、家を「居場所」に選んだ理由は、中学生の頃と変わらず、「落ち着く」ことをあげた（Table 3, 6-①・②）。「精神的安定」の機能が高いと言える。しかし、自分のひとり部屋がないことをずっと不満に感じておいて、「一人暮らしをしたい」とも話した。

④「居場所環境」の及ぼした影響について

中学生の頃の「居場所」が及ぼした影響について聞くと、友だち関係における自分の変化を話した（Table 3, 7-①）。また、不登校という出来事はあったが、「適応指導教室に行ったから今の自分がある」と話し、現在はそのことをポジティブに受けとめていることが伺えた（Table 3, 7-②）。

5. 考察

(1) 「居場所環境」という視点から見た支援経過

相談室に来るまでのA子の「居場所環境」は、家のみであり、中学生の「居場所環境」として重要な「友だちのいる居場所」がない状態であった。中学生の「友だちのいる居場所」は、ほとんどが学校環境であるが、A子にとって学校は「元から友だちがいなかった」場所であり、「居場所」とは感じられない場所であった。そこに班員や友だちと思っていた子とのトラブルにより、「被受容感」が下がり、またそれまではリーダーとして活躍していた合唱もうまくまとめることができなくなったことで、「自己肯定感」も持てなくなっていたと考えられる。一方で、「家族のいる居場所」はずっと「居場所」であり続けた。家族、特に母親がA子の状態を受け入れ、無理に学校に行かせなかったことが大きな要因と言える。しかし、家にいた期間、A子は「死にたかった。」「学校にも行かないで、何をしてるんだろう。」と苦しみ続けた。「家族のいる居場所」のみがあっても、精神的安定が得られなかったことが示されている。

Table 3 A子のインタビュー調査の結果

質問者(調査者)	回答者(調査対象者)
1. 中学校を休んでいた時期について	
①<中学の頃は、今振り返ってなんで休んだのだと思う?>	① 「クラスに友だちがいなかった。なんかちよつとしたことがいっぱい積み重なっちゃった。その時の、班員が駄目とか。」
②	② 「気持ち悪くなったり、お腹痛くなったりして(行けなかった)。」
③	③ 「学校行ってる時は、行くのが当たり前だから、苦しいとか考えることなく行ってた。それで、朝、吐いたりするようになった。」
④<家にいる2ヶ月間って、どうだった?>	④ 「何もする気が起きない。外にも一切出ない。」
⑤	⑤ 「死にたいとか思ってた。」
⑥	⑥ 「自信がなくなってた。自分自身に対して。学校も行かないで、何やってんだろうって。」
2. 中学校の相談室(「友だちのいる居場所」「家族・友だち以外の人のいる居場所」)について	
①<学校の相談室は、あなたにとってはどうして居場所だったの?>	① 「自分のことを話せたから。」
②<それは、友だちがいるような居場所とは違うかな?>	② 「不登校って状態だと、大人と関わる場所っていうのが、もちろん親はいるけど、他になくてつらかった。元から話すことが好きだから、楽しかった。」
3. 適応指導教室(「友だちのいる居場所」)について	
①<適応指導教室は、どうだった?>	① 「本当に救われた。」
②	② 「休んで、みんな同じ境遇だから、結構話が分かる。気持ちも、違うかもしれないけど、多少はわかるから、話せる。」
③<他はどう?適応指導教室で救われたなっていうのは?>	③ 「学校と違って自由。あんまりがちりちりのことをみんなでもやるっていうのどときつかったかな。」
<どんな面が自由って?>	「勉強あんまりない!学年と違う人とつるんでるっていうのは、新鮮だった。楽だった。」
<あの自由さがいいのかな?>	「うん。」
④	④ 「後、先生がみんな、良かった。なんだろう、学校の先生と違って話しやすい。」
<違う?>	「学校の先生は、固いっていうか。(生徒の)人数が少ないっていうのもある。だから、よく話せた。」
⑤<今振り返って?>	⑤ 「無理はちよつとしたかなと思う。すごいハイだったから。結構楽しかったけど、ちよつと疲れてた。先生にも言われた。自分を主張するのに必死だった。」
⑥<4ヶ月の反動ってさっき言ってたよね。>	⑥ 「多分、(不登校の時には)人との会話がなかったから。今考えるとあのテンションは尋常じゃなかったかな。」
4. 中学生の頃の家(「家族のいる居場所」)と家族関係について	
①<家が居場所だったのは、なんでだろう?>	① 「落ち着けた。一番いる時間が長い。」

<p>②<休んでいる時、家の人とはどうだった？></p>	<p>② 「自分が動けない時は駄目だろうって、たぶん思っていてくれた。無理にプレッシャーをかけたりしなかったから、それは本当に助かった。」</p>
<p>5. 現在の学校(「友だちのいる居場所」)と友だち関係について</p> <p>①<学校はどうして？></p> <p><友だちの存在が大きい？></p>	<p>① 「学校は、友だちが(理由)。今までで多分一番気が合うから。」</p> <p>「はい。」</p>
<p>②<今の友だち関係は？></p> <p>6. 現在の家(「家族のいる居場所」)について</p> <p>①<家は？長く居ること…？></p>	<p>② 「前(中学校の頃)は特定の友だちと遊ぶってことがなかった。学校では遊んでるけど、(関係が)浅くて。今は、結構、休みの日とか遊ぶし、深く付き合っている感じ。」</p> <p>① 「無条件で。何って言う理由は特にないけど。」</p>
<p>②<家は、どこが？どんな時間帯？></p> <p><家の人がいる時は？></p>	<p>② 「リビングで一人にいる時。」</p> <p>「いることが当たり前だから。一人にいる時の方が落ち着くけど、家の人がいっても落ち着く。」</p>
<p>7. 「居場所環境」の及ぼした影響について</p> <p>①<中学生の頃、こういう居場所があったことで、自分が変わったと思うところある？></p> <p><考えられる時間にもなった。自分のことか友だちのことか。></p> <p><考える間もなく行ってたんだね。></p>	<p>① 「人の気持ちを前よりは考えるようになった。当たり前のことかもしれないけど、これをされたらどう思うかなとか。自分だったらどうかなとか。前は学校で精一杯で、考える時間がなかった。」</p> <p>「そう。学校行ってる時は、行くのが当たり前だから、苦しいとか考えることなく行った。で、朝、吐いたりするようになった。」</p>
<p>②<自分が中学校を休んでいたことについて、今どう思う？></p> <p><みんなつながってくるんだ。不登校、相談室、適応指導教室、高校と。></p>	<p>② 「不登校になったから、今の自分がある。不登校になってなかったから、あの高校には行ってなかった。あの高校に行けたことが良かった。」</p> <p>「はい。」</p>

相談室登校ができるようになったことで、A子には相談室という新たな「居場所」が増えることとなる。そこにはSCという、友だちでも家族でもない他者が存在していた。A子は相談室が「居場所」であった理由を、「自分のことを話すことができた」ためと言っている。「居場所」の「被受容感」「思考・内省」の機能が高かったと言えるだろう。A子は、SCに自分のことを話すようになり、その中で学校に行けなくなった原因や辛さを言語化していった。学校に行けない現実を受け入れ、無理をしなくなったことで、身体症状が消失していったと考えられる。しかしSCは話のできる大人というだけの存在ではなかったと考えられる。A子とSCは、卓球やボードゲームをして遊んだり、雑談をしたり、楽しい時間

を共有した。その意味では、大人でありながら友だちにも近い存在であったように思われる。

A子の身体症状がなくなり元気になってきたため、SCは相談室での他の生徒との関わりや、適応指導教室への通級を支援する。「友だちのいる居場所」がないことに対する対応であるとともに、母親とA子との関係が悪化し「家族のいる居場所」がなくなることに対する対応でもあった。A子は適応指導教室を振り返り、自分と同じような人がいたこと、先生が話しやすかったこと、自由だったこと、考える時間ができたことを「居場所」であった理由にあげている。「居場所」の心理的機能の「被受容感」「行動の自由」「思考・内省」を満たしていたと言える。またA子は、適応指導教室の行事での役割を行うことで学校では得られなかった「自己肯定感」を得ることもでき、自分自身に対する自信の回復にもつながったと考えられる。しかし、「異常なほどテンションを上げていた」ことも振り返っている。適応指導教室に行く前に失ってしまった自信、友だちができるかといった不安を考え合わせると、A子の躁の防衛の表れであったのではないかと考えられる。そのような、一見わがままで羽目をはずした行動も、適応指導教室は受け入れてくれる場であった。相談室のSC、あるいは適応指導教室のスタッフは、不登校等の不適応問題に関して知識と経験を持ったいわゆる専門家である。A子の状態を理解し、受容的な関わりがあったことが、相談室と適応指導教室が「居場所」であり続けた1つの要因であったと考えられる。

高校になってから、A子は再び不登校になりそうになる。その時A子は、SCのいる中学校の相談室と適応指導教室を訪れている。A子は、助けを過去の「居場所」に求めた。しかし、A子が実際に学校復帰できたのは、高校の先生と友だちの存在であった。過去の「居場所」に戻りつつも、しっかりと現在の生活の場に「居場所環境」を作っていくことができたことの表れである。また、中学校の時の適応指導教室と違い、高校の時の「友だちのいる居場所」は、テンションをそれ程あげなくても普段の自分でいられる自然な「居場所」となっていたと考えられる。

(2) A子の「居場所環境」と中学生のメンタルヘルスに寄与する「居場所環境」との比較検討

SCが関わるまでのA子の「居場所環境」は、「家族のいる居場所」のみで

あった。中学生のメンタルヘルスに寄与する「居場所環境」と比べると、「友だちのいる居場所」がない。A子は、「家族のいる居場所」はあると感じてはいたが、そこでの精神状態は、「死にたい」と思うほど悪いものであり、この1ヶ所の「居場所」のみで満たされている状態ではなかった。母親がSCの所に相談に来ることから、A子とSCの関わりが始まり、A子には相談室という新たな「居場所」ができる。後に、相談室で友だちとも関わることになるが、頻度はそれ程多くない。ここでの主な他者は、SCであったと言える。SCは、「家族・友だち以外の人」であり、相談室は「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」に含まれない、「特別な居場所」といえる場所であったと考える。登校している中学生の「居場所環境」の調査からは、得られなかった「居場所」である。A子のアンケート結果では、相談室の「居場所」機能が強く、重要度も最も高い得点を付けていることから、相談室が様々な機能を高く持った「居場所」であったことがわかる。それは、SCが、A子の相談にのり、気持ちを受け止め整理し、今後の方向を一緒に考えるカウンセラーとしての役割と、雑談をし、一緒に遊ぶといった友だちに近い役割といったように、複数の役割を果たしていたからではないかと考えられる。

続いて、適応指導教室が「居場所環境」に含まれる。ここは、「友だちのいる居場所」である。しかしここも、自然発生的に形成された場所ではなく、不登校の児童生徒のために用意され、適応指導教室の先生がおり、守られた場所であるという意味では、「特別な居場所」と言えるのではないかと考える。A子は、ここを卒業し、自分の力で「友だちの居場所」を持つことができるようになった。つまり、学校の相談室は、家から適応指導教室をつなぐ「特別な居場所」であり、適応指導教室は、さらに「友だちのいる居場所」へつなぐ「特別な居場所」の役割を果たしていたと考えられる。

調査時現在のA子の「居場所環境」は、「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」の2種類である。「特別な居場所」はなくなり、自分の生活の場にしっかりと「居場所環境」を持てていると言える。A子の「居場所環境」は、中学生の頃に不登校となったことで、「友だちのいる居場所」の喪失、そしてA子の自覚はなかったが、適応指導教室に通級する前は母親との関係が悪化し「家族のいる居場所」の喪失の危機にあった。SCが関わり、「友だちのいる居場所」の回復として適応指導教室を、「家族のいる居場所」の回復として母親に対するカウンセリン

グを継続したことで、その危機を脱することができたと考えられる。中学生の頃に、「家族のいる居場所」と「友だちのいる居場所」を持てたことが、その後の高校、専門学校での「居場所環境」につながっているものと考えられる。

しかし、A子の調査時現在の「居場所環境」と大学生に必要な「居場所環境」に比べると、「自分ひとりの居場所」がない。大学生において、「自分ひとりの居場所」がないことは、特に自我同一性の形成に影響を及ぼす可能性が示されている(杉本・庄司, 2006c)。A子自身が、「一人暮らしをしたい」と言っているように、年齢的にも「家族のいる居場所」の役割が少なくなり、「自分ひとりの居場所」が充実してくることが、今後の自我同一性の形成や精神的健康度には必要であると言える。

6. まとめと今後の課題

本稿では、スクールカウンセラーが不登校の中学生に対して行った支援経過について、「居場所環境」という視点からの考察を試みた。その過程の中で、「居場所環境」として分類していた3種類の「居場所」(「自分ひとりの居場所」「家族のいる居場所」「友だちのいる居場所」)以外の「特別な居場所」の存在が明らかとなった。杉本・庄司(2006a, b, c, d)の一連の「居場所環境」の実証的研究は、特に不適應問題を抱えている生徒や学生を対象としたものではない。今回、不登校という不適應問題を中学校時代に抱えた生徒の事例を追うことで、登校している生徒たちの量的なデータによる調査結果からは抽出できなかった、この新たな「特別な居場所」の存在を抽出できた。今回の事例における「特別な居場所」は、不適應問題を抱えた生徒にとって、ある一時期存在し、適應していく過程の中で消失していくこと、自然発生的ではなく、用意された「居場所」ではあるが、その後の適應への橋渡しの役割を果たしていることが、特徴といえる。

現代の子どもたちの「居場所環境」の様相を見ると、個人による独自性がなく「自分の部屋」「学校」「家」の3箇所を集約され(杉本・庄司, 2007b)、家と学校以外に「居場所」を持つ子が少ないことが危惧される。その背景には、現代における人間関係の希薄化という問題があるのではないだろうか。学校における担任教員以外の人、あるいは地域社会における家族以外の人々が積極的に子どもに関わる姿勢が薄れているために、子どもたちは生活空間のさまざまな場所に「居場所」を持つことができず、限られた場所だけになってしまうことが推測される。

そのことで、1つの「居場所」がなくなった時に、大きな損失となり、精神的健康を保つことができず、不適応問題を抱えやすくなると考える。学校や家に「居場所」を持っていない子どもたちが、このような社会的な現状の中で、自分の力で新たな「居場所」を見出していくことは、困難なことと言わざるを得ないのかもしれない。そのような中で、自然発生的ではなく、用意された「特別な居場所」が、その後の適応への橋渡しの役割を果たす可能性を見いだせたことは、不登校問題の対策としての「居場所」づくりに示唆を与えるものであると考える。

したがって今後は、この「特別な居場所」の検討を、さらに進める必要がある。具体的には、現代の子どもたちにとって、「特別な居場所」にはどのような場所が存在し、そこにはどのような他者がいて、どのような役割を果たしているのかを明らかにしていくことが課題である。本稿では、「特別な居場所」という漠然とした名称にしたが、今後のこれらの研究により、「特別な居場所」の様相を明らかにすることで、より適切な名称を検討することができると思われる。これらの研究が進むことで、不登校等不適応問題の1つの有効な対策としての「居場所」づくりを提案していくことができるのではないかと考えられる。

引用文献

- 安齊智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-275.
- 今村幸恵・服部恒明・中村朋子 2003 中学生のストレス、自己効力感、ソーシャルサポートとストレス反応の因果構造モデル 学校保健研究, 45, 89-101.
- 菊島勝也 1999 スレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7(2), 66-76.
- 文部省 1992 登校拒否(不登校)問題について-児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会会報, 44, 25-29.
- 文部科学省2007生徒指導上の諸問題について
<http://www.mext.go.jp/b-menu/toukei/main-b8.htm>
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 小畑豊美・伊藤義美 2003 中学生の心の居場所の研究-感情と行動及び意味からの考察- 情報文化研究, 17, 155-167.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友と

- の信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 杉本希映・庄司一子 2006a 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の変化の研究, 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 杉本希映・庄司一子 2006b 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究, 学校心理学研究, 6 (1), 31-39.
- 杉本希映・庄司一子 2006c 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連—現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として— 筑波教育学研究, 3, 83-101.
- 杉本希映・庄司一子 2006d 大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連—過去の「居場所環境」の認知との比較を中心として— 共生教育学研究, 1, 37-47.
- 杉本希映・庄司一子 2007a 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40 (1), 81-91.
- 杉本希映・庄司一子 2007b 「居場所環境」に関する発達の変化の検討—中学生と大学生の比較検討を中心として— 共生教育学研究, 2, 13-22.
- 住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 Pp. 3-17.
- 田中麻貴・田眞誠一 2004 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究, 5, 219-228.

Appendix 1 「居場所」の心理的機能尺度(杉本・庄司, 2006)

質問項目	
I 被受容感	III 自己中心
自分を本当に理解してくれる人がいる	自分の好きなことができる
悩みを聞いてくれる人がいる	自分の好きなようにできる
人と一緒にいられる	自由だ
ひとりじゃない	自分の物がある
自分はそのメンバーである	自分だけの時間をもてる
自分は大切にされている	寝ることができる
人のために何かができる	IV 思考・内省
II 精神的安定	自分のことについてよく考える
満足する	物思いにふける
無理をしないでいられる	1日のことを振り返る
本当の自分でいられる	ポーッと考えこむことがある
幸せ	V 自己肯定感
おもしろい	何かに夢中になれる
素直になれる	自分の能力を発揮できる
楽しい	好きな物がある
自分らしくいられる	自分はうまくやれる
誰にもじゃまされない	自分に自信をもてる
安心する	VI 他者排除
	他人のペースに合わせなくていい
	人を気にしなくていい
	人に会わなくていい